

「地図豆」の地図を広げて街歩き

21-1 江戸切絵図などを広げて愛宕山で昔を探す（距離約 2.5km）



愛宕山 池の中の工部省三角点？

【街歩きの概要】

江戸期の地図（「江戸切絵図」）、明治中期までの地図（「五千分の一東京図」「迅速測図」）、明治後期以降の地図（「旧版地図」）、そして現代の地図（一万分の一地形図）などを広げることで、愛宕山周辺の昔探しを楽しくする。



江戸切絵図「愛宕山周辺」と5千分1「東京図」

地図豆知識：迅速測図というもの

明治中期から開始された5万分の1地形図の作成は、水平位置と高さの原点とこれをもとにした三角点を各地に設置し、これを土台にした本格的なものである。全国整備した三角点にもとづいているということは、地図上のすべての情報が正確な地球上の位置(経度緯度)と関連付けられていることになる。

一方、「迅速測図」と呼ばれる、明治初期に参謀本部陸軍部測量局によって簡易的に作成した地図がある。当時明治政府は、西南の役などの各地で起きた反乱鎮定における苦戦の原因の一つに、地理的情報の不足があると考え、その主となる地図の整備を急いだ(1880年 明治13年)。

正式名称を「第一軍管地方二万分一迅速測図原図」と呼ぶ明治初期のこの地図は、全国的な基本測量(5万分の1地形図作り)の実施に先立ち、関東平野のほぼ全域と房総・三浦半島について、明治13年から明治19年にかけて参謀本部によって作成した我が国初の広域測量による測量の成果である(そのほかに、同時期のものとして、東京府内で整備した正則な三角点による「五千分の一東京図」(明治14年から明治17年)がある)。

ただし、同地図作成は、予算と時間制約のことから、前述のような正規の方式をとらずに実施された。それは地図作成範囲の基準点を図解法という方法で整備し(「図根測量」という)、この基準点に基づいて平板測量により細部の地図作成を行う方法で行われた。

関東平野を網羅する921枚の迅速測図の作成には、主にフランス技術を習得した旧幕臣が携わり、1886年(明治19年)に完成した(「第一軍管区地方2万分1迅速測図原図」、複製物の商品名は「明治前期測量2万分1フランス式彩色地図」)。

このように、「迅速測図」は図根測量という相対位置を明らかにしただけの基準点をもとにしているから、地球上の絶対位置を表す経緯度が表示されていない。そして、一定のひずみを予想しなければならない。したがって、現在の地図と重ね合わせる場合には、表現された主要河川や道路などの主要地物を対比してする工夫が必要である。

ではあるが、一部を除きおおむね縮尺1/20,000で作成された迅速測図原図は、等高線等による地図表現のほか、フランス式に水彩絵の具により市街地の状況や田畑が色鮮やかに彩色されて見た目にも美しいばかりではなく、畑地や林地には植栽の種類も記されて、見るものに、約100数十年前の土地の景観や成り立ちを鮮明に伝えるものである。

我が国近代地図作成史上最高の傑作といわれている地図原図は、「五千分の一東京図」を含めて国土地理院に保管されていて、(財)日本地図センターより復刻販売されている。



迅速測図（上目黒村付近）と視図（神奈川県金目村）

地図豆知識：江戸切絵図というもの

江戸切絵図とは、江戸時代末期（1850年以降）に携帯用に作成された切図（分割した地図）で、大きさは48センチ×46センチほど。約30枚の切図で当時の江戸が網羅されている。

版元によって、吉文字屋板、平野屋板、近吾堂板、尾張屋板があって、いずれも使いやすさを最優先した結果、一定地域を一枚の範囲に収めるためのデフォルメもあり、縮尺はおおむね一万二千分の一だが、詳細は図中でも一定ではない（市販の複製地図帳なら、紙の大きさに納める工夫もしている）。中でも色鮮やかに彩色されたものは、大江戸ガイドマップといった風である。

切絵図には、いくらかの決まりといったものがあって、武家屋敷や寺社では、書かれた名称の頭方向が屋敷の表門入口、坂の名称も頭方向が坂のてっぺんを示している。版元にもよるが、川の名前も上流から下流に向かって書かれ、大名の上屋敷には家紋が、中屋敷には■の記号、下屋敷には●の記号が付されているものもある。

さらに、町名は江戸城方向を頭にして書かれているなど、徹底的にユーザを意識した作りになっている。

そうしたことから、江戸切絵図は江戸歩きの者に好評を博し、実用品として用いられただけでなく、浮世絵などと並んで江戸土産としても重宝されたという。

残された江戸切絵図からは、江戸期から明治にかけての東京の姿を見ることができるから、現代の江戸ウォーカーにとっても必需品である（再掲）。

ところで絵図と近代的な測量によった地形図との情報を比較するためには、道路網などを手がかりとして絵図を拡大・縮小し、さらに変形した上で重ね合わせるなどの作業が必要になる。それは、目視で比較するとしても同じである。また、地形図と（中心投影であ

る) 空中写真についても対象地域が平坦地であれば、同じ手法で概ね重ね合わせることができる。



絵図と地形図の重ね合わせ

(お絵描きソフトなどで、上図のような変形をしたうえで地形図と重ね合わせる)

【道順】

東京メトロ神谷町駅→攝取院→長元院→天徳寺→栄立院→光岳院→興昭院こんにやく閻魔→栄閑院さる寺→栄壽寺→真福寺→田崎真也店→愛宕神社・池の中の工部省三角点・三等三角点「愛宕山」・几号水準点「愛宕山」→NHK放送博物館→愛宕山エレベータ→愛宕山トンネル→伝叟院→青松寺→青龍寺→清岸院→考寿院→俊朝寺→光円寺→光明寺→専光寺→東京メトロ神谷町駅



ルートマップ

【街歩き解説】

過去の地図、特に「江戸切絵図」は、縮尺も向きも一定ではないから、そのままの状態では他の地図と見比べ、重ね合わせをするには無理がある。最低でも、地図に記入された方位を参考にしながら、現代の地図と対比して、切絵図の正確な「北」を確認しておくとい

い。
パソコンのお絵かきソフトを使える者なら、切絵図を縮小して、おおよそ1万分の1の縮尺にし、その後現代地図と重ね合わせて使用すると、現代の風景や地図との対比が容易になるだろう。

それほどパソコンが得意でない者には、切絵図と現代の地図を透明紙で重ねて見ることができる市販地図帳が便利である。CD-ROM版の「江戸～東京 重ね地図」というものも市販されている。

一般的な昔探しをする歩きでは、事前にこうした地図を参照して、通りの形などから昔が残っていそうな地域を予想してから始めるといい。また、大都市などでは、太平洋戦争時の戦災で被害を受けた場所も多いから、その点も知っておくといい。

そのようすは、1946年以降に撮影された米軍の空中写真を参照するとよくわかる。



米軍写真（1947）

①東京メトロ神谷駅から寺町を歩く

江戸後期から現代までの地図を広げて、昔探しの歩きを神谷駅からスタートする。

今回の街歩きは、愛宕山とその麓を時計まわりめぐるコース。実は、これは以前にシルバーの方を対象にした2時間講座で実施したものである。

ここで、愛宕山の周辺を選んだ理由は、昔が多く残っているのではないかと予想を立てての行動ではない。単に交通が便利な地点であって、都内23区内では珍しい小山があって、地形的に変化に富んでいるからだ。しかも、ここは小山を上るエレベータが完備した稀有

な場所だから、坂道や階段が苦手な向きにも対応できそうだったから（実際には下りにしか使わなかった）、こちらを優先した。

事前に、江戸期の地図（「江戸切絵図」）、明治期の地図（「五千分の一東京図」、そして現代の地図（一万分の一地形図）を見比べて見る。

「江戸切絵図」からは、愛宕山とその南につづく高台とその麓には寺社が多くあり、寺町といった雰囲気である。その外周は武家屋敷が広がっている。現在の桜田通りには、車坂町、神谷町、あるいは天徳寺門前町などと地名があって、いくらか商店などが軒を連ねていた風である。

そして、「五千分の一東京図」を見ると、武家屋敷のいくつかは公共施設などに変化しているものの、江戸期のようにそのままに日本庭園を持つ屋敷も残り、愛宕山周辺の寺町、現桜田通り周辺の商店なども江戸期のまま残っているようだ。さらに、1947年撮影の米軍写真を見ても、この辺りの戦災の被害は壊滅的というほどでもない。

しかし、現代の一万分の一地形図からは、愛宕山とその麓の一部をのぞき、昔の風景はすっかり消えてしまったようである。主要な通りには大きなビルが林立し、武家屋敷にあった日本庭園のひとつかけらも残っていないようである。

したがって、今回の昔探しの歩きでは、「そのほとんどを愛宕山の麓に残る寺町歩きに終始することにして、大きな期待はしない」、というのが事前の予想である。



長元院

②天徳寺へ

神谷町駅から愛宕山周辺の路地を主体に時計回りにめぐる。

「切絵図」を見てすぐに目に着くのは、愛宕山の西側に広がる天徳寺である。そして東側には、青松寺があり、併せて14ほどの両寺の末寺らしき名前が並んでいる。

ところが、「東京図」では、同じ東側には天徳寺だけでなく中小の寺が広がり、東側の末寺らしきものは、すでに無い。大きな改築が行なわれたのだろうか。

ともかく、桜田通りに並行した裏通りを北上して見ると、最初に目に入ったのは、攝取院（せっしゅいん）である。やはり、浄土宗天徳寺末寺の一つであるが、明治期（「東京図」）には、東麓最北位置にあったもの。そして、同じように愛宕山を背にして長元院がある。これは、明治期の位置そのまま、入口から細い参道が続き、33段の石段の先に本堂がある。

そして、道の西（左）側に、天徳寺が現れる。浄土宗江戸四か寺の一つで、慶長11年（1611）霞が関から当地に移転してきたのだという。本寺は、将軍家、尾張徳川家、越前福井藩など十数藩主の菩提寺であり、残された「弥陀種子板碑」は、港区有形文化財に指定されている。やや新しいが立派な六角堂もあるが、小さな石塔などに目をやれば、そこに葵の御紋などを見つけられるだろう。

③真福寺まで



栄閑院（通称さる寺）

そして、木造の栄立院、鉄筋コンクリート造り光岳院などがある。

ついで、石造閻魔王像が鎮座する（通称「こんにやく閻魔」）、興昭院。この閻魔は眼病に靈験あらたかとして信仰され、祈願者の願が成就したときには、そのお礼として「こんにやく」を供えることが習わしとなっていたのだという。さらに、木造の栄閑院、コンクリート造りの栄壽寺と続く。

栄閑院は、通称さる寺といい、猿の石像、猿塚碑、猿の彫り物もある。不確かながら、「猿回しに化けた盗賊が役人に追われて寺に逃げ込んできた。盗賊は住職の教えに改心し旅立った。いつしか、残された猿は寺の人気者になり、『猿寺』と呼ばれるようになった」とか。「解体新書」、「蘭学事始」で知られる杉田玄白の墓もある。ここまで、いずれも浄土宗で、天徳寺の末寺である。

そして、山麓を東へまわって真福寺に到着する。

残念ながら、真福寺（真言宗）は平成7年に建築されて立派なビルになっている。

本寺は、1591年に照海上人が鉄砲洲に庵を構え、1605に家康公より愛宕下に土地を賜り、開創したという。1858年（安政5年）には、攘夷派浪士などへの安全対策などを考慮してオランダ使節団の宿舎になった。真福寺は、「東京図」にも記載がある。

辺りの道路網の基本形に変化はないが、ここまで時代を感じさせる建築物には、ほとんど出会わなかった。江戸期、明治期の地図にあったいくつかの寺院には統合があり、あるものは姿を消している。

④愛宕山へ

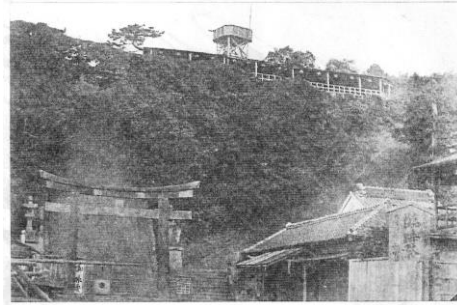
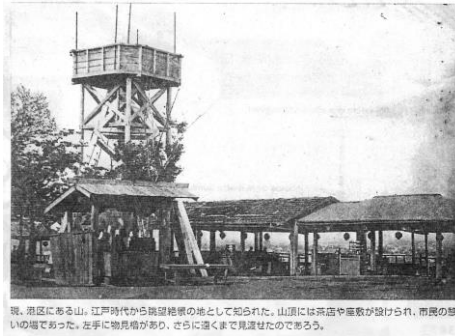


愛宕山下「江戸名所図会」

愛宕神社のある愛宕山は、標高 26mで、東京 23 区内の最高峰である（新宿区にある人工の箱根山は 44.6m）。江戸時代には、江戸湾が見渡せたということで、景勝地としてにぎわった。

愛宕神社は、徳川家康の命で祀られたといい、火伏の神として知られる。登頂には、男坂・女坂・新坂などの道があり、男坂は神社正面の八六段の急勾配の石段で、寛永年間に曲垣平九郎がこの石段を馬で上下したと伝えられることは出世階段と呼ばれることは有名だ。

北手にある緑に覆われた新坂を上れば、坂の中ほどに田崎真也ワインサロンが、愛宕山上には、東京都産の食材のみを使った創作和食の店もある。



愛宕山は武蔵野台地の東端の一つで、三方が開けて眺望に富み、祭神の地としての誇れが高かった。山上には愛宕神社（愛宕権現社）があり、社前の86段の男坂の急な石段は、1836年に曲権平九郎が飛馬で駆け上り下りたという話で有名である。右手に107段の女坂が見える。写真手前には愛宕権現社の鳥居が見える。大正14年、この山上から日本で初めてラジオが放送された。

愛宕山の測量風景（1876=1878 年ごろ）



3等三角点「愛宕山」と几号水準点

標目	メートル	尺
西ヶ原村山林課御用地内木標	二四、四〇〇八	八〇、五三二六
芝愛宕山三角測點石上面	二五、四二九六	八三、九一七七
全所安永八年二月ト記シタル碑ノ臺	二六、二三六一	八六、五七九一
石橋面 符ヲ彫ル		
再調査、確台石右側面 地中ニ埋没を認見 其ニ個性的女 標		
但此三ノ標トシテハ 標點已上ハ、メ ル尺トハ、其十分小 數ナリ		
以上光榮 73点記入		



几号水準点について記した「地理局雑報」と愛宕山略図（角田篤彦氏図）

愛宕神社境内には、その立地条件もあって、1等三角点「愛宕山」が地下に埋められている。この周囲には、港区にある日本経緯度原点に近い1等「東京（大正）」、新宿四ツ谷にある防衛省内の3等「市ヶ谷」、皇居東御苑内の3等「本丸」、江東区の永代橋に近い3等「二の橋」、中央区月島の3等「月島」、港区有栖川公園内の3等「本村」、新宿区神宮外苑の2等「千駄ヶ谷」などの三角点がある。この高まりに立って、かつてこの場所から観測したことを想像してみる。

そして境内にある池の中には、明治9年に工部省が江戸城富士見櫓を第1点として設置した日本で最初の三角点13点（富士見櫓、越中島、須崎辨天、本所一ツ目、同三ツ目、芝愛宕山 上野下寺町、目白台、宮益町、寺島村、田端村、戸越村、第二台場）のうちの一つだと思われる標石？が見える。

さらに、明治9年以降に東京府内各所に設置された約150点の几号水準点の一つも残されている。几号水準点のリストが記載された『地理局雑報』という資料には、「全所（芝愛宕山）安永八年二月ト記シタル碑の台石横面口符ヲ彫ル」とあるから、これを頼りに探してみるといい。

⑤青松寺へ

愛宕山山頂には、1925年（大正14年）、この地で日本最初のラジオ放送が行われたNHK放送博物館がある。そして、愛宕山神社と放送博物館の中間地点をくり抜くように愛宕山トンネルがある。愛宕山東西の交通緩和のために1930年（昭和5年）に完成したのだといい、23区内唯一の「山岳トンネル」である。開通当日は愛宕側と虎ノ門側では祝提灯を掲げて町ぐるみで祝ったという。

そして、足に自信のない方のためにエレベータもあって、これは、23区内唯一の「山岳エレベータ」とでもなるのだろうか。ちなみに、北区の飛鳥山公園には、延長わずか48mの「あすかやまこうえんモノレール（あすかパークレール）」がある。



愛宕山登山エレベータ 2 階通路

愛宕山頂散策を終えると、エレベータか階段道で麓に下りて、再び寺めぐりにもどる。

ちょっと趣のある愛宕山トンネルから神谷町方面をのぞいた後は、青い屋根が特徴的な、大本山総持寺の出張所だという曹洞宗伝叟院（切絵図には伝宗院？ 東京図には伝叟院とある）を、そして江戸府内の曹洞宗の寺院を統括した江戸三か寺の1つ青松寺を訪ねる（泉岳寺・総泉寺・青松寺）。

青松寺は、太田道灌が文明8年（1476年）に、麴町付近に創建したといい。その後家康の時代に当地に移転した。山門に見事な4天王が安置されている。新しい建築物ながら立派な本堂があり、左手の鐘楼には、切絵図にも記載がある時の鐘が残っている（昭和31年に復興したもの）。

そして、境内にあった「獅子窟学寮」は、変遷ののち今日の駒澤大学へと発展した。

地図を比較して見ると、青松寺だけは、敷地の広さが江戸期のままであることに、少し驚く。



青松寺

⑥東京メトロ 神谷駅へもどる

その後、浅野内匠頭の叔父・内藤忠勝がここで切腹したという青龍寺、40段の階段に並行したエスカレータのある清岸院、考寿院、俊朝寺などがある。いずれも曹洞宗。

さらに、切絵図にもある光円寺、光明寺、専光寺を訪ねるが昔を感じるものは残っていない。さらに、切絵図に「神谷丁」とある辺りを散策するが大きな収穫はなく、神谷駅へもどり、愛宕山で昔を探す歩きを終わる。